



世界無名戦士の墓 (国登録有形文化財)

大観山頂に建つ第二次世界大戦戦没者の納骨・慰霊廟です。昭和24年、埼玉県議会副議長を務めていた当時の医師・長谷部秀邦氏が発起人となって建設運動を始め、多くの人びとの浄財と奉仕作業によって昭和30年に落成しました。毎年5月には「世界無名戦士の墓慰霊大祭」が行われます。なお、国内には、このような施設は、昭和34年に建設された「千鳥ヶ淵戦没者墓苑」以外にはありません。



木造五大明王像 (県指定文化財)

五大尊(五大明王像)は墨田区の五大尊本堂で、永らく秘仏として守り伝えられてきました。五大尊とは不動・降三世軍荼利・大威徳・金剛夜叉の五大明王の事で、大日如來の化身、使者として人々を教化する存在とされています。そのおからかで個性的な作風と誠実かつ純粋な彫技から、平安時代末期頃の地方仏師による作と考えられています。古代・中世にまで遡る、五体をつつた明王像としては、県内唯一の存在です。現在は、埼玉県立歴史と民俗の博物館に寄託されています。



木造如意輪観音半跏像 (県指定文化財)

カヤ材の彫刻造で、胎内に平安時代の応保2年(116)の墨書銘がある関東最古の在銘像として、美術史上大変貴重な作品です。「如意(ねおい)」という地名の由来ともいわれています。



絹本着色釈迦三尊及阿難迦葉像 (法恩寺蔵・国指定重要文化財)

中央に釈迦如來その両側に阿難・迦葉文殊菩薩・普賢菩薩を画いたもので、元の天曆3年(1330)の銘が入っています。「絹本着色高野・丹生明神像」とともに、国の重要文化財に指定されています。



曹洞宗長昌山龍穩寺

曹洞宗は平安時代と伝えられ、永享2年(1430)に室町幕府の第6代将軍足利義教が上杉持朝に命じ、無極慧微を招いて復興したのが開基とされます。文明4年(1472)に太田道真・道灌父子が兵火に罹り荒廢していた伽藍を再建し、以後曹洞宗の大寺院に発展しました。境内で一層目を引く山門は一階には四天王を安置。高欄付きの縁が回る一階内部には、観音菩薩・十六羅漢が祀られています。また、外壁に道元禪師一代彫彫刻が施された経蔵の内部は壁画で飾られ、一切経を収納する八角形の輪蔵が設けてあります。その他、歴代住職墓地には、道真・道灌父子の墓があります。



龍穩寺山門 (町指定文化財)

越生の偉人

太田道灌 (1432年~1486年)



道灌は、龍ヶ谷の山枝庵で誕生したと伝えられています。道灌は鷹狩の途中、にわか雨に遭い、蓑を借り、とある貧しい民家を訪ねます。出てきた少女が一枝の山吹を差し出しました。この謎掛けが解けなかった道灌は、「七重八重花は咲けども山吹の実の一つだになきぞ悲しき」という古歌を教えられ、「蓑がない」悲しさを山吹に託した少女の想いを知りました。己の不明を恥じた道灌は、歌道を目指し、文武両道の名将になった」という有名な逸話の故地です。



渋沢平九郎 (1847年~1868年)



渋沢(尾高)平九郎は、弘化4年(1847)、武蔵国横沢郡下手計村(現深谷市)に生まれました。長兄淳忠と次兄長七郎、いとこの渋沢成一郎や渋沢栄一らと学問や文芸、剣術に親しみ、彼らの影響を受けて育ちました。慶応3年(1867)、渡欧する栄一の養子となった平九郎は、幕臣として徳川家復権を図るべく、彰義隊・振武軍に参加しますが、飯能戦争で新政府に敗れ、越生の地で短い生涯を終えました。



大宮神社本殿 (町指定文化財)

文武天皇元年(697)創建、承和3年(836)再営と伝えられています。文久3年(1863)再建の本殿の見事な彫刻は、熊谷の彫物師・小林齋熊山橋正信によるものです。町指定の「聖天像」が祀られています。



八幡神社本殿 (町指定文化財)

神社に伝わる宝物の金剛盤に「正嘉2年」(1258)の銘があり、創建が鎌倉時代以前にまで遡ることを物語っています。現在の社殿は天保5年(1834)に建立され、本殿を飾る豪華な彫刻は、江戸浅草の彫物師・嶋村源蔵によるものです。